

論 説



品質工学会「ビジョン30に向けた活動報告」(3)

—ビジョン35を構想するためのビジョン30長期計画の活動の総括と今後の課題—

*Robust Quality Engineering Society "Report on Activities toward Vision 30" (3)
— Summary of the Activities of the Vision 30 Long-term Plan for Envisioning
Vision 35 and Future Tasks —*

吉澤 正孝*

Masataka Yoshizawa

(2023年1月号の(2)から続く)

4.3 イノベーションへの貢献

イノベーションへの貢献は、V30の狙いである、「あらゆる分野に評価でイノベーション」を直接受ける活動である。品質工学は、物事を創造し提供する組織活動の中で、価値の対象となる品質を商品品質と技術品質に分け技術品質を主に扱う学問である。技術品質は、製品やサービスが出荷後に社会に与える損失として定義している。そして、その損失を機能のばらつき損失、使用コスト、弊害項目による損失に限定し、それらに影響を与える機能のばらつきを中心に評価技術を開発すると同時に、3つの損失を最終的に評価する経済評価の方法を研究・開発していくことが学問をより深化させていく主要活動である。したがって、品質工学を適用し、損失が低減されると、それに比例して利得が得られる。一方、現状の技術品質で作られた製品を維持するためには、それらの損失を最小化する保全作業や使用コストが生じている。それらは労働負担を強いる、と同時に国民総生産額に計上されることになる。技術品質が改善するということは、その労働負担が減り、国民総生産が減少する。すなわち国民的は無駄が排除されると同時に労働の機会を失うことになる。したがって、技術品質による改善以上の新しい価値の創造を行うことにも品質工学は寄与しなければならない。新しい価値の創造をするときに、技術品質を

最小にしておくことが、社会生産性の向上に不可欠であると品質工学では考えている。そのために新しい価値を生み出すイノベーションへの適用が最も望まれている。過去も、工作機械、複写機、半導体などの事業での先端技術を対象に研究し成果を得てきた。今後も社会の生産性を上げるためには、新しい領域の研究開発が不可欠と考え、特にイノベーションが生じるところにあると考え、新しい産業分野の専門家との共同研究を行うという方向を確認し、次の2つの領域を設定して活動をしてきた。

- 1) 地域産業のイノベーション
- 2) 国家レベルのイノベーション

それぞれの活動は以下のようなものである。

4.3.1 地域産業のイノベーション

その1つは地域産業への貢献である。具体的に研究を行うとしても地域企業や研究組織との共創作業が要求される。すでに述べたように、この活動は学会組織内の総力を用いなければならない活動で、4.1節「自己実現と社会的認知」の活動に連携して共同研究パートナーを見つけだす探索活動から開始した。1つは地区にある産業技術総合センター等との協業である。もう1つは、各地方品質工学研究会への貢献である。一部の地方研究会では、産官学連携のプロジェクトが進んでいるところもある。良い事例を参考に地区産業への貢献ができないかその方法を検討した。その活動を支援する形で地域産業のイノベーションのテーマを見つけ出し研究を行うという考えである。

- (1) 地方研究会との連携を通じた地域イノベーシ

*クオリティ・ディーブ・スマーツ(責)